



## 事象構造による日本語複合動詞の自他交替の分析

著者	史 曼
号	13
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第155号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/57702">http://hdl.handle.net/10097/57702</a>

SHI  
史MAN  
曼

事象構造による日本語複合動詞の自他交替の分析

(主査)

教授 小野 尚之      准教授 ナロック ハイコ

准教授 中本武志

准教授 副 島 健 作

## 論文内容の要旨

## 1. 研究目的

日本語の複合動詞は統語的複合動詞と語彙的複合動詞に大別されているが（影山 1993）、統語的複合動詞は生産性が高いのに対して、語彙的複合動詞は厳しい制限が課されている。例えば、「倒すー倒れる」のような自他交替する動詞を後項動詞（以下、V2）に取る際、「切り倒すー

\*切り倒れる」のように、他動詞形の複合動詞しか成立しない。これについて、影山（1993）などの先行研究では、「\*切り倒れる」のような複合動詞の不成立を「他動性調和の原則」という一般原則によって説明した。この原則は、動詞と動詞の組み合わせに着目した、本質的に合成的な観点からの説明である。しかし、この原則には、「打ち上げるー打ち上がる」のような、自他交替が成立する複合動詞を例外扱いするという欠点がある。実は、日本語では「他動性調和の原則」によって予測されるよりもはるかに多くの複合動詞が自他交替を起こす。しかし、その理由は完全に明らかにされたとは言えない。本研究は、語彙的複合動詞の自他交替現象について、従来の分析とは異なるアプローチが

ら説明を試みることによって、語彙的複合動詞の自他交替のメカニズムを究明するものである。

## 2. 理論的枠組み

影山(1993)をはじめとする多くの研究では、語彙的複合動詞の自他交替の問題を前項動詞(以下、V1)とV2の組み合わせの問題に還元して説明している(松本1998, 由本2005など)。すなわち、「\*切り倒れる」が排除されるのは、他動詞と非対格動詞の組み合わせが認められないからと考えるのである。しかし、自他動詞の対として見れば、「倒す—倒れる」が成立し、「切り倒す—\*切り倒れる」が成立しないのは、後者において「切る」が何らかの阻害要因になっていると想定するのが自然である。この想定を出発点にして、本稿では、「他動性調和の原則」のような合成的な原理ではなく、語彙意味論的な分析から自他交替要因の説明を行う。語彙意味論の基本的な考えは「動詞の意味がその統語的ふるまいを決定する」ということであり(小野2000:3)、動詞の自他交替を動詞の意味構造によって説明している。本稿は語彙意味論の考えに従って、語彙的複合動詞の自他交替を語彙的複合動詞の意味構造に原因を探る。

本稿では動詞の表す事象の情報を事象構造で表記する。そして、本稿では事象構造は動詞の表す概念的意味を分解して表示する語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure:LCS)と、事象のタイプ及び事象の内部情報を表記するPustejovsky(1995)の「Event Structure」という二つの構造を含めると捉えている。Rappaport Hovav, M. and B. Levin(1998,2010)ではLCSは動詞の意味クラスの決定に関わる構造的意味(event schema)と、個別の意味を表す「root」で構成されるとしている。また、Pustejovsky(1995)では事象タイプは「state」「process」「transition」という三つであると述べている。本稿ではこれらの先行研究を踏まえて事象構造の表示法を定めた。例えば、本稿では、Rappaport Hovav, M. and B. Levin(1998,2010)の動詞の二分類(様態動詞と結果動詞)の事象構造は次のように示される。

### (1) ①. 様態動詞:

- a. LCS:[x ACT<MANNER>]or [x MOVE<MANNER>]

EVENTSTR=E1=e(x):process

- b. LCS:[x ACT<MANNER> ON y]

EVENTSTR=E1=e(x,y):process

### ②. 結果動詞:

- a. LCS:[y BECOME BE AT<state>]or [x MOVE [path z]]

EVENTSTR=E1=e2(y):transition

- b. LCS:[x ACT]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]

EVENTSTR=E1=e1(x,y):process

E2=e2(y):state

(1) のように、動詞は大きく様態動詞と結果動詞に分類されており、また、項構造によって、それぞれ自動詞か他動詞かという二つに分けられている。①様態動詞では、「root」は<MANNER>であり、「ACT」(行為)か「MOVE」(移動)を修飾する。様態動詞の事象タイプは「process」である。②結果動詞では、「root」は「BECOME」の項になるか、「MOVE path」の項になる。結果動詞の事象タイプは「transition」であるが、②b 結果他動詞の場合は二つの下位事象から構成され、Pustejovsky (1995) に従って、それぞれの下位事象を「process」、「state」と示す。

### 3. 分析結果と考察

本稿では、語彙的複合動詞の自他交替を複合動詞全体の意味構造によって分析した。語彙的複合動詞は単純動詞と同じように、語彙化された一語であり、単純動詞とパラレルな意味構造を持っているため、自他交替においてもパラレルな分析ができると考えた。第2章では本稿で用いられる理論的枠組み—語彙意味論を概観した。第3章では、語彙的複合動詞の自他交替を分析する前提として、語彙的複合動詞の語形成を明らかにし、語彙的複合動詞の事象構造を提示した。第4章では、第3章で明らかにされた語彙的複合動詞の事象構造に基づいて、語彙的複合動詞の自他交替について議論を展開した。第5章では、語彙的複合動詞における意味変化について考察し、意味変化が起こった場合の事象構造を提示した上で、語彙的複合動詞の自他交替について分析した。では、本稿の第3章以降の内容をもう少し詳細に述べる。

#### 第3章 語彙的複合動詞の事象構造

第3章では、語彙的複合動詞の語形成について分析し、語彙化の角度から語彙的複合動詞の事象構造を提示した。まず語彙的複合動詞は語彙化された一語であることについて述べた。語彙的複合動詞は形態的緊密性を持っており、意味の慣習化と語彙的結合制限を備えている。そして、V1とV2の意味関係が無限ではなく、いくつかに限られているように、一つのまとまった事象を持っている。このように、語彙的複合動詞は語彙化された一語であると考えられる。次に語彙化された一語の事象構造と一語の表す可能な意味について論じた。Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1998,2010) の一連の研究及びそれをめぐる議論を参考にし、判断テストに基づいて、日本語で単純動詞が表す可能な意味は「様態」(「叩く」)、「結果」(「壊す」)、「様態+結果」(「貼る」)であることを明らかにし、それぞれの事象構造を提示した。様態動詞における「root」が<MANNER>であり、結果動詞の「root」は結果<state>である。様態・結果動詞は<MANNER>も<state>も「root」として指定されている。そして、移動事象か状態変化事象か、自動詞か他動詞かという要素を考慮に入れ、単純動詞の事象構造を詳しく表1のようにまとめている。

表1：事象タイプと事象構造

語彙化		事象構造	語例
-----	--	------	----

タイプ			
様態	行為様態	LCS:[x ACT<MANNER>] EVENTSTR=E1=e (x) :process (+Manner)	笑う、叫ぶ、遊ぶ、 働く、座る、寝る...
	移動様態	意志的: [[x ACT<MANNER>]CAUSE[x MOVE]] 非意志的: [y MOVE<MANNER>] EVENTSTR=E1=e (x/y) :process (+Manner)	歩く、走る、駆ける、 滑る、流れる
	働きかけ	LCS: [x ACT<MANNER>ON y] EVENTSTR=E1=e (x,y) :process (+Manner)	蹴る、叩く、殴る、 掃く、押す、踏む...
結果 (数が最も多い)	状態変化	LCS:[y BECOME BE AT<state>] EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition	壊れる、潰れる、切れる、 開く、潰れる
	移動経路	意志的: [[x ACT]CAUSE[x MOVE[ <sub>path</sub> z]]] 非意志的: [y MOVE[ <sub>path</sub> z]] EVENTSTR=E1=e (x/y) :transition	帰る、戻る、上がる 落ちる、上がる
	使役変化・移動	LCS: [[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner) E2=e2 (y) :state	壊す、切る、開ける、 下げる、上げる、降ろす、沈める、戻す
様態・結果		LCS: [[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2 (x,y) :state	切る、刻む、塗る、 吊る、煮る、刈る、 研ぐ、縛る、盛る、 巻く

日本語の単純動詞において、結果動詞の数が一番多く、様態動詞はその次であり、様態・結果動詞の数は非常に少ない。様態動詞は様態が指定されているが、変化結果は指定されていない。一方、結果動詞は変化結果が指定されているが、様態が空白である。このため、複合動詞の語彙化の動機付けが生じてきた。それは単純動詞の表す事象の空白部分を埋めるということである。結果動詞の数が圧倒的に多いということを考えると、日本語の複合動詞は結果動詞に「様態」という意味要素を付加するものが多いと予測できる。形式化した LCS で表すと、(2) のようになる。

- (2) a. 結果動詞: [[x ACT<sub><空白></sub> ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]  
b. 様態動詞: [x ACT<sub><MANNER></sub> ON y]  
c. →様態・結果動詞:  
[[x ACT<sub><MANNER></sub> ON y] CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

この仮説を実際に検証するために、『複合動詞レキシコン』というデータベースから 1272 語 を抽出し、「様態動詞」「結果動詞」により、複合動詞の語彙化パターンを調査した。その結果は表 2 にまとめる。

表 2：語彙的複合動詞の語彙化タイプ

語彙化タイプ	様態+様態	結果+結果	様態+結果	結果+様態
語数	47	167	<b>1058</b>	0?

表 2 から分かるように、語彙的複合動詞において、「様態+結果」タイプは最も多い。数はそれほど多くないが、「様態+様態」、「結果+結果」タイプも収集された。これらのタイプもやはり一語としての事象構造をなしている。「結果+様態」タイプは見当たらない。これはこのタイプは「下位事象+上位事象」という構造を持つため、一語としての事象構造にならないからであると考えられる。各タイプの語彙的複合動詞が表す事象構造を表 3 にまとめる。

表 3：語彙的複合動詞の事象構造

語彙化タイプ	事象タイプ	事象構造	例
様態 + 結果	様態 + 結果	[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE[yBECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2 (y) :state	叩き壊す
		[x ACT<MANNER> ]CAUSE [x BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x) :process (+Manner) E2=e2 (x) :state	遊び疲れる
		[y MOVE<MANNER> [path z]] [[x ACT<MANNER>]CAUSE[x MOVE [path z]]] EVENTSTR=E1=e1 (x/y) :process (+Manner) E2=e2 (x/y) :state	流れ落ちる 持ち回る
様態 + 様態	様態	[x ACT<MANNER>] EVENTSTR=E1=e1 (x) :process	泣き喚く 遊び暮らす
		[[x ACT<MANNER>]CAUSE[X MOVE]] EVENTSTR=E1=e1 (x) :process	飛び跳ねる 持ち歩く

結果 + 結果	結果	[y BECOME BE AT <state>] EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition	焼け焦げる 折れ曲がる
		[[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process E2=e2 (y) :state	折り曲げる

「様態＋結果」タイプの複合動詞は例えば「叩き壊す」「切り落とす」のようなものがあり、単純動詞の様態・結果動詞と近似している。「様態＋様態」タイプの複合動詞（飛び跳ねる、持ち歩く）は全体的に上位事象だけを持っている様態動詞になる。「結果＋結果」タイプの複合動詞（折り曲げる、焼け焦げる）は結果事象だけを持っている結果動詞になる。このように、語彙的複合動詞は単純動詞と同じように語彙化された一語であり、単純動詞とパラレルな事象構造を持っている。これを次の表 4 にまとめる。

表 4：語彙的複合動詞と単純動詞の関係

LCV	単純動詞
「様態+結果」→	様態・結果動詞
[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]（叩き壊す）刻む	
[[x ACT<MANNER> ]CAUSE [x BECOME BE AT<z >]]（歩き疲れる）	再帰動詞
[[x MOVE<MANNER>] CAUSE[x MOVE [path z]]（駆け上がる）	(climb)
「様態+様態」→	様態動詞
[x ACT<MANNER> ON y]	
「結果+結果」→	結果動詞
[y BECOME BE AT<state>]	
[[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]	

#### 第 4 章 語彙的複合動詞の事象構造と自他交替

「動詞の意味がその統語的ふるまいを決定する」という語彙意味論の基本的な考え（小野 2000 : 3）にしたがって、単純動詞とパラレルな事象構造を持っている語彙的複合動詞は単純動詞と同じ自他交替のメカニズムが働いていると考えられる。この考えに基づいて、第 4 章では単純動詞の自他交替の要因を明らかにした上で、第 3 章で明らかにされた語彙的複合動詞の事象構造に基づき、語彙的複合動詞の自他交替について議論した。

第 4 章ではまず単純動詞の自他交替のメカニズムは、「起因事象＋結果事象」という使役事象を持

っており、結果事象が焦点化されるということであると論じた。先行研究で、一般に広く受けられている自他交替する動詞の意味構造は (3) のようなものである。自他交替する他動詞のほうは、使役主  $x$  が対象物  $y$  に働きかけ、そのことが対象物  $y$  が結果状態<state>に至る変化を引き起こす。自動詞は  $y$  が変化することを表す。

(3) 自他交替する動詞の意味構造：

他動詞：[[ $x$  ACT on  $y$ ]CAUSE[ $y$  BECOME BE AT<state>]]

起因事象

結果事象

自動詞：[ $y$  BECOME BE AT<state>] 結果事象

本稿では手段の指定を含む複合動詞の自他交替を考慮に入れて、「結果事象」に着目して、自他交替の意味的条件を「結果事象の焦点化」と再定義した。基本的に、「事象の焦点化」は「root」の指定と捉える。ただし、複合動詞の場合、「様態・結果+結果」タイプでは、「root」は「様態」と「結果」という二つであるが、「結果」が繰り返し用いられることにより、焦点化されるようになることがある。なお、複合動詞の結果事象の焦点化は第 5 章で論じる。

単純動詞の場合は、(4) a のように、結果他動詞は起因事象と結果事象の両方を持っており、起因事象（手段・様態）が指定されておらず、結果事象のみ指定（焦点化）されている場合、自他交替が成立する。(4) b の様態・結果他動詞も起因事象と結果事象という複合事象を持っているが、様態も結果も指定されており、両方とも焦点になっているため、自他交替できない。

(4) a. 結果他動詞（使役変化/移動動詞）：

上げる、開ける、温める、切る、倒す、壊す、潰す、落とす、降ろす、返す…

LCS:[[ $x$  ACT on  $y$ ]CAUSE[ $y$  BECOME BE AT <state>]]

EVENTSTR=E1=e1 ( $x,y$ ) :process

E2=e2\* ( $y$ ) :state

b. 様態・結果動詞：

刻む、彫る、塗る、吊る、煮る、刈る、吸う、研ぐ、縛る、盛る、結う …

LCS:[[ $x$  ACT<MANNER> on  $y$ ]CAUSE[ $y$  BECOME BE AT <state>]]

EVENTSTR=E1=e1\* ( $x,y$ ) :process

E2=e2\* ( $y$ ) :state (e\*はその事象が焦点になっていることを示す。)

次に「起因事象+結果事象」を持っている語彙的複合動詞を考察し、ほとんどの複合動詞は「様態+結果」タイプ（叩き壊す、切り落とす）<sup>1</sup>であり、(5) のように、「様態」も「結果」も指定されてお

<sup>1</sup> 表 2 から分かるように、日本語の語彙的複合動詞において、「様態+結果」タイプは最も多い。



り、自他交替できない。一方、「折り曲げる」など少数の「結果+結果」タイプの複合動詞は(6)のように、結果事象だけが指定されており、自他交替できると分析した。

(5) 「様態+結果」タイプの複合動詞

叩き壊す : [[x ACT<MANNER> on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]

EVENTSTR=E1=e1\* (x,y) : process (+Manner)

E2=e2\* (x,y) : state

(6) 「結果+結果」: 「積み重ねる」「折り曲げる」

LCS: [[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) : process

E2=e2\* (y) : state

最後に、「花火を打ち上げる—花火が打ち上がる」「吊り下げる—吊り下がる」「貼り付ける—貼り付く」「編み上げる—編み上がる」などのように、「様態+結果」タイプでありながら、自他交替できる複合動詞を観察し、それは V1 あるいは V2 の語彙的意味の希薄化によって自他交替できるからであるという仮説を提案した。

## 第5章 語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化と自他交替

第5章では、文法化理論を取り入れて、語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化について考察し、語彙的意味の希薄化が起こった場合の事象構造を提示し、語彙的複合動詞の自他交替について分析した。

語彙的複合動詞は V1、V2 の語彙的意味の希薄化、結合制限の弱化及び V1、V2 の脱範疇化という三点で文法化の特徴を持っていると考えられるため、本稿では Hopper and Traugott (2003) の「再分析」「類推」による文法化の段階の分け方を参考に、語彙的複合動詞における V1、V2 の語彙的意味の希薄化を考察した。再分析段階では、語彙的複合動詞における V1 あるいは V2 は意味が希薄化し、意味的な再分析が起こっているが、語彙的複合動詞の基本的な構造は保持されており、結合する動詞に選択制限を課す。類推段階では、V1 あるいは V2 は動作としての本来の意味が完全に喪失しており、選択制限が消失しており、広範囲の動詞と結合できるようになっている。

まず V1 の語彙的意味の希薄化による複合動詞の自他交替について述べた。V1 の語彙的意味の希薄化の有無についての判断テストは「テ形動詞」との言い換え、「格支配能力」を有しているかどうかという二つのテストを設定した。その上で結合制限を考察し、「再分析」段階か「類推」段階かを分ける。判断テストに基づいて、語彙的複合動詞における V1 の語彙的意味の希薄化を表5のように三段階に分けて考察してみた。

表 5 : V1 の語彙的意味の希薄化の段階分け

段階		例	意味	構造
第一段階	本義	打ち落とす	本義	「様態+結果」
↓				
第二段階	再分析	打ち上げる	副詞的な意味	「様態+結果」
↓				
第三段階	類推	打ち重なる	接頭辞	「V1+非動作性動詞」

第一段階では、V1 は動作としての本義が保持されている。第二段階は、いわば文法化が起こってきた段階で、「再分析」により、V1 は辞書的意味を失い、動作を表す意味から副詞的な意味へ転義している。この段階では、結合する V2 には選択制限が課されており、V2 は使役変化・移動動詞であり、複合動詞全体は「様態動詞+使役変化・移動動詞」(様態+結果)であり、第 2 章で論じた語彙的複合動詞の事象構造「様態+結果」と一致している。第三段階では、V1 の意味変化がもっと進んでおり、「類推」により、結合する V2 は非動作性の動詞まで広がっている。

各段階の複合動詞の事象構造を次のように説明する。「打ち落とす」では、「打つ」は様態他動詞であり、「落とす」は使役移動動詞であり、「打つ」は「落とす」の手段を修飾する。その事象構造は上述した「叩き壊す」などのような「様態+結果」タイプの複合動詞と同じである。

「再分析」段階では、V1 の個別的意味「root」(MANNER) が失われているが、構造的意味「event schema」が保持されている。「花火を打ち上げる」という例を取り上げて、再分析段階では、<MANNER>がなくなっていることについて説明した。(7) に示されているように、a「打つ」は単独で使う場合は、「手/ラケット/バットで打つ」は言える。また、b「ボールを打ち上げる」において、「打つ」の本義が生きている場合でも「手/ラケット/バット」で修飾できる。一方、c「花火を打ち上げる」は「手/ラケット/バットで」と共起できない。このことから、「花火を打ち上げる」における「打つ」は<<MANNER>が消失していると考えられる。

- (7) a. 手/ラケット/バットで打つ  
b. 手/ラケット/バットでボールを打ち上げる  
c. \*手/ラケット/バットで花火を打ち上げる

これにより、「花火を打ち上げる」の事象構造は (8) のようになる。

- (8) a. 上げる : LCS[[x ACT<MANNER> ON y] CAUSE [y BECOME BE AT<UP>]]  
b. 打つ : [x ACT<HITTING> ON y]<sup>2</sup> → 意味の希薄化

<sup>2</sup> ここでは網掛けで「打つ」という動詞の語彙的意味の希薄化を表す。

c.花火を打ち上げる：

[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT<UP>]]

起因事象（無指定） 結果事象（焦点）

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner)

E2=e2\* (y) :state

このように、V1 の個別的意味<MANNER>の消失により、V2 への様態の指定がなくなり、本来の「様態」と「結果」両方が指定されている事象構造は「結果」だけ指定されるようになっている。このため、「花火を打ち上げるー花火が打ち上がる」のように自他交替が成立する。

第三段階、「類推」の段階では、V1 の意味が完全に喪失しており、V2 への結合制限が消失し、V1 の構造的な意味も失うようになっている。この場合、複合動詞というより、「接頭辞＋動詞」という派生語に近く、自他交替現象とは関係なくなる。

V1 の語彙的意味の希薄化と複合動詞の自他交替を次のようにまとめる。

表 6: V1 の語彙的意味の希薄化と自他交替

段階	例	事象構造	自他交替
第一段階: 本義	ボールを打ち上げる	[LCS1]・[LCS2] →[[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=*e1 (x,y) :process (+Manner) E2=*e2 (x,y) :state	×
第二段階: 再分析	花火を打ち上げる	V1 の<Manner>の消失 → [LCS1]・[LCS2] [[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner) E2=*e2 (y) :state	○
第三段階: 類推	葉が打ち重なる	V1 の[event schema]の消失 → [LCS2] : [y BECOME BE AT<state>] EVENTSTR=E1=e1 (y) :transition	×

次に V2 の語彙的意味の希薄化と語彙的複合動詞の自他交替について論じた。V2 の意味変化についての判断テストは V1 よりやや複雑である。「再分析」段階についての判断は、「格支配テスト」「テ形連接との言い換え」と「結合制限」の他に、「V1 との意味の重なり」というテストを加えた。「吊り下げる」「貼り付ける」などのような V1 と V2 は意味の重なりがある複合動詞において、V2 は格支配能力を有しているものの、V1 の意味の一部の複製である場合、V1 は複合動詞の意味的な中心にな

り、複合動詞の深層構造に変化が起こっているため、希薄化と認める。判断テストに基づいて、V2 の語彙的意味の希薄化の段階分けも大きく「再分析」段階、「類推」段階に分けたが、Hein et al. (1991) の意味変化のプロセス (PERSON > OBJECT > ACTIVITY > SPACE > TIME > QUALITY) を考慮に入れてもっと詳しく分類した。「～上げる」「～つける」「～切る」を取り上げ、V2 の語彙的意味の希薄化について考察し、V2 の意味変化は「活動>空間>時間>質」という方向に沿って進んでいると分かった。本稿は影山 (2012) に倣って、V2 が空間を表す複合動詞を「空間的アスペクト複合動詞」、時間を表す複合動詞を「時間的アスペクト複合動詞」と呼ぶ。また、V2 が強調を表す複合動詞を強調機能複合動詞と呼ぶ。V2 の語彙的意味の希薄化の段階性を次の表にまとめる。

表 7: V2 の語彙的意味の希薄化の段階性

V2	第一段階 (動作)	第二段階Ⅰ (空間的アспект)	第二段階Ⅱ (時間的アспект)	第三段階 (強調機能)
～上げる	打ち上げる	見上げる	編み上げる	怒鳴り上げる
～付ける	編みつける	貼り付ける 投げつける		照りつける
～切る	噛み切る		売り切る	困りきる

各段階の複合動詞の事象構造についての説明であるが、空間的アスペクト複合動詞において、V1 は意味上、統語上の中心であり、V2 はただ V1 の動作の方向を明示するだけである。その事象構造を (9) のように表すことができる。なお、V2 は V1 の表す動作の方向を示しており、補助的な役目を果たしているので、V2 の LCS が小さく表記されている。

(9) LCS= [[LCS1][LCS2]]  
「事象の主要な内容」「方向」

空間的アスペクト複合動詞は V1 の事象タイプによって 2 つに分けられる。それは「様態＋結果」タイプと「様態・結果＋結果」タイプである。「見上げる」「投げつける」などにおける V1 は様態他動詞であり、V1 に方向性が含まれていないので、V2 は V1 の動作の方向を明示する。複合動詞全体の事象タイプは V1 と同じように「様態動詞」になる。その事象構造は次のようになる。

(10) LCS: [x ACT <sub><MANNER></sub> on y]

↑  
|  
————— 方向

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

もう一つのタイプは「貼り付ける」「吊り下げる」などの「様態・結果+結果」複合動詞である。

V1 は複合動詞の事象内容を表しており、様態が指定されている起因事象と結果事象という使役事象を持っている。V2 は結果動詞であるが、語彙的意味が「方向」へと希薄化しており、V1 に含まれている変化結果を繰り返すことにより、その変化結果を強調すると考えられる。本稿では、強調することを焦点化と捉える。「貼り付ける－貼り付く」「吊り下げる－吊り下がる」のように、様態と結果両方が指定されているが、変化結果が強調（焦点化）される場合、自他交替が成立する。「貼り付ける」のような複合動詞の事象構造を（11）のように表す。

(11) LCS:[LCS1][LCS2]]

V1[[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

V2 <state> 方向性

→[[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y **BECOME BE AT <state>**]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=\*e2 (x,y) :state

時間的アスペクト複合動詞の事象構造は三つの部分を含むと考えられる。一つは V1 の事象構造であり、これは複合動詞の事象の主要な内容を表す。一つは V2 の時間的アスペクトを表す事象構造であり、これは複合動詞の事象の展開の仕方を表す。一つは V2 がどの事象を取り立てるという情報である。例えば、「編み上げる」の事象構造を次のように示す。

(12) 編み上げる」の LCS:[LCS1][L-Asp-Z]]

[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE [**z BECOME BE AT-MADE**]] [L-Asp Completive]

└──────────┐

起因事象

結果事象

完了

ここでは、「編む」は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っているが、「上げる」は「結果事象」を取り立てることにより、「結果事象」が焦点化されると主張したい。これを次のように説明する。「編む」は「作成動詞」であり、「作成動詞」は同じ文脈で「材料」と「生産物」両方を取ることができる。例えば、(13) のような例である。

(13) a. 糸を編む セーターを編む

「糸でセーターを編む」という事象では、「糸」は「材料」であり、「セーター」は「生産物」である。この事象を言語化する際、(13) a のように、「糸を編む」も言え、セーターを編む」も言える。「材料」を内項に取る場合、「起因事象」に焦点を当てており、「生産物」を内項に取る場合、「結果事

象」に焦点を置いていると思われる。つまり、作成動詞は「起因事象」にも「結果事象」にも焦点を当てることができる。しかし、(14) に示されているように、これらの作成動詞は「上げる」と組み合わせると複合動詞になると、同じ文脈で「生産物」しかを内項に取ることができない。つまり、「結果事象」だけに焦点を置くことができる。これによって、「作成動詞+上げる」は「結果事象」が焦点化されるといえるであろう。

(14) 糸を編む セーターを編む

—\*糸を編み上げる セーターを編み上げる

このように、「編み上げる」のような「作成動詞+上げる」複合動詞において、V1 は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っており、V2 は V1 の「結果事象」を取り立てることによって、複合動詞全体は結果事象が焦点化されているため、「編み上げる—編み上がる」「炒め上げる—炒め上がる」のように自他交替が可能になる。

語彙的複合動詞における V1、V2 の語彙的意味の希薄化による自他交替を表 8 にまとめる。

表 8：複合動詞における語彙的意味の希薄化と自他交替

自他交替例	希薄化	事象構造	要因
花火を打ち上げる —花火が打ち上がる	V1	V1: [[x ACT ON y] CAUSE[yBECOME BE AT<state>]] V2: [x ACT<MANNER>ON y] →V1V2: [[x ACT ON y] CAUSE <u>[y BECOME BE AT&lt;state&gt;]]</u> EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (·Manner) E2=e2* (y) :state	様態の希薄化による結果事象の焦点化
切手を貼り付ける —切手が貼り付いた	V2	V1: [[xACT<MANNER>ONy]CAUSE[yBECOME BE AT<state>]] V2:<state> V1V2: [[xACT<MANNER>ONy]CAUSE <u>[y BECOME BE AT&lt;state&gt;]]</u> EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	結果の強調による結果事象の焦点化

セーターを編み上げる —セーターが 編み上がる	V2	V1: [[xACT<MANNER>ONy]CAUSE[yBECOME BE AT<state>]] <div style="text-align: center;"> ↑  V2:[L-Asp-completive] </div> V1V2: [[xACT<MANNER>ON y] CAUSE [ <u>y BECOME BE AT &lt;state&gt;</u> ]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	
-------------------------------	----	--	--

これらの語彙的複合動詞は V1 の事象タイプは異なるものの、本来、いずれも V1 は V2 の様態を指定する「様態＋結果」タイプの語彙的複合動詞である。しかし、語彙的意味の希薄化により、いずれも本来の事象構造に変化が起こっている。具体的な操作は異なるが、これらの自他交替する複合動詞は最終的に似ている事象構造を持つようになっている。それは「起因事象」と「結果事象」を持っており、「結果事象」が焦点化されるという事象構造である。「打ち上げる」などのような V1 の語彙的意味が希薄化している複合動詞は、V2 への手段の指定がなくなるのによって、結果事象が焦点化されるようになっている。一方、「貼り付ける」のような空間的アスペクト複合動詞及び「編み上げる」のような時間的アスペクト複合動詞はいずれも手段が指定されているが、V2 の語彙的意味が希薄化しており、「結果事象」を強調することによって、結果事象が焦点化されるようになっている。

語彙的複合動詞の自他交替を通して、複合動詞の語形成は文法化、語彙化の相互作用の結果バランスが保たれて進行していくものであることが分かった。日本語の複合動詞は様態を補充するために生じたものであり、そのほとんどは「様態＋結果」という語構造を持っている。ほとんどの複合動詞は自他交替できないのはその語構造を持っているからである。「打ち上げる」「貼り付ける」「編み上げる」などのような少数の自他交替できる複合動詞は意味変化した産物である。

#### 4. 本研究の意義と今後の課題

本研究は三つの面で意義を有していると思われる。それは、複合動詞の語形成研究における意義、動詞の自他交替研究における意義、そして文法化研究における意義である。以下ではそれぞれについて述べる。

まず複合動詞の語形成研究における意義であるが、複合動詞は二つの動詞からなるものであるため、今まで合成的なアプローチによって分析され、語彙化の角度から、「一語」が表す可能な意味という視点から論じられたことがない。本稿では語彙的複合動詞の語形成について、語彙化の角度から、単純動詞と同じように、「一語」が表す可能な意味「様態」「結果」「様態・結果」のいずれかになるという視点から論じている。複合動詞を単純動詞と同じように「様態」「結果」から考えれば、語形成の制約や事象構造も容易に分かってくる。

そして、本稿では「様態」「結果」という角度から、単純動詞の事象構造を提示した上で、同じ表記の仕方では体系的に語彙的複合動詞の一語としての事象構造を提示した。これにより、語彙的複合動詞

の単一事象としての事象構造の全体像が見えてくる。つまり、「様態+結果」「様態+様態→様態」「結果+結果」という三つである。

次に自他交替研究における意義であるが、語彙意味論の研究では、自他交替という現象は多くの学者の関心を集め、様々な研究成果を挙げた。しかし、単純動詞と複合動詞の自他交替を同様に扱う研究はまれである。本稿では、複合動詞も単純動詞も語彙化された一語であるので、「結果事象の焦点化」と同じ自他交替のメカニズムが働いていると考えている。使役事象の手段が指定されても、結果事象が焦点化されれば、自他交替が可能であるについて分析した。これにより、単純動詞の自他交替と複合動詞の自他交替を統一した視点から説明できた。

最後に文法化研究における意義であるが、日本語における文法化研究は、統語的複合動詞及びテ形複合動詞から補助動詞への発展などについて議論するものがほとんどであり、語彙的複合動詞における意味変化のような初期段階の文法化についての研究は少ない。本稿では、たくさんの例を取り上げて、判断テストに基づいて複合動詞における意味変化について詳しく考察した。文法化の初期段階における意味変化では具体的にどのような現象が起こっているのかを考察したことは意義を有していると思われる。そして、本稿は複合動詞における意味変化を段階分けした後、各段階の複合動詞の事象構造を提示した。従来、文法化の研究で、意味変化を事象構造と関連させて研究したものがほとんどない。本稿では、意味変化が起こった場合、動詞の意味が具体的にどのように変化し、どの部分が失われ、どの部分が保存されているについて考察した上で、事象構造を提示した。形式化した事象構造で表すことによって、意味変化をより明確にする点で文法化研究に一石を投じられれば幸いである。

本稿では、語彙的複合動詞の自他交替について、「結果事象の焦点化」によって論じたが、この考えは英語の結果構文と中国語の複合動詞の自他交替などにも適用できると思われる。日本語の複合動詞と中国語の結果複合動詞、英語の結果構文と比較対照するという視点は重要な意義を持つのであるが、これについての分析を今後の課題に残す。

また、本稿では語彙的複合動詞の自他交替について、他動詞からの自動詞化だけを論じたが、自動詞から他動詞へ派生するという他動詞化現象も見られている。複合動詞の他動詞化についての議論も今後の課題としたい。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の複合動詞に関わる自他交替現象を詳細に分析することによって、従来とは異なる観点から複合動詞形成のしくみを明らかにしたものである。従来の研究では、他動詞と自動詞の対応関係を持つ動詞が複合動詞として用いられた場合、自動詞としての用法に制限が生じることが知られていたが、その理由については必ずしも十分な説明が行われていなかった。本論文は、複合動詞の形成において、事象構造に自動詞化を妨げる何らかの意味的要因が生じると想定し、その要因を明らかにすることに成功した。



現在、多くの研究では、複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分け、語彙的複合動詞の方がより厳しい制約の下に置かれていると考えるのが一般的である。その制約についてはこれまでいくつか提案が行われ活発な議論の対象となってきた。そのような提案の中でも特に影響力が強いものに「他動性調和の原則」というものがある。他動性調和の原則では、複合動詞の構成要素である 2 つの動詞が他動性に関して一致していなければならないとするものである。しかし、この原則には多くの例外が認められるため、その妥当性についてなお論争が続いているのが現状である。

他動性調和の原則による説明では、複合動詞の自他交替における制約を、動詞タイプの組み合わせの可否によるものとしてきたが、本研究では、事象構造形成における意味的な要因を考察することによって詳細な意味内容を分析の中に取り込むことができるようになった。そのため、従来の研究では例外として処理せざるを得なかった現象にも説明を与えることが可能となった。また、事象構造を分析に取り入れることによって、意味の希薄化による文法化の段階性を捉えるという提案が可能となり、言語のダイナミックな変化の過程について示唆するところの多い研究となった。

本研究は、このように事象構造を分析に取り込むことによって、従来の語彙意味論の分析に立脚しながらも、これまで明らかにされてこなかった複合動詞の自他交替の現象について新しい知見を加えることに成功している。先に述べたように、従前の研究では例外として扱われていた複合動詞の自他交替現象を初めて体系的に整理し、従来とは異なるアプローチによって説明したところに本研究の独創性が認められる。審査会では特にこの点が高く評価され、本論文は執筆者が自立した研究能力と学識を有することを示すものと認定された。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。